氏名（本籍）	陳（チン）　漢（カン）（中国）
学位の種類	博　士　（美　術）
学位記番号	博　美　第 215 号
学位授与年月日	平成20年３月25日
学位論文等題目	〈作品〉１．風化された記憶－対面2006、２．風化された記憶－浮遊2007 〈論文〉人間表現としての塑像彫刻の可能性－内なる像の発見へ
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学　教　授　（美術学部）　北　郷　悟
（論文第１副査）	〃　准教授　（　〃　）　布　施　英　利
（作品第１副査）	〃　教　授　（　〃　）　山　本　正　道
（副査）	〃　〃　（　〃　）　米　林　雄　一
（　〃　）	〃　〃　（　〃　）　深　井　隆

（論文内容の要旨）

本論文では、土、テラコッタ（イタリア語terracotta）による人間像表現の可能性について考察した。また筆者が考えている彫刻の本質的な要素のひとつとして、「内なる像」の存在を中心においた。作品は、実際に目に見えている「かたち」だけてはなく、目に見えない領域にその本質を秘め、それによって存在が成り立っていることを明らかにする。目に見えない領域における彫刻の本質への考察は、塑造彫刻にとって、新たな表現の可能性を引き出す手掛りになるのではないかと考えている。これまで自分が行っている（行ってきた）実際の制作活動の意味を、本論において改めて再検討することによって、「内なる像」の意味あい、重要性、必然性が明らかになると考えている。

本論は、以下に記す３章と関連資料から成っている。

第一章「土による人間表現の彫刻について」

土、テラコッタの素材による造形の歴史を概観する。先人達の土に対する思い、土による人間表現の創作活動の変遷をたどることで、彫刻表現の特徴について考察する。これによって、現在の自分自身が試みているテラコッタによる人間表現に、歴史にもとづいた裏付けを附加し、新たな可能性への道が開けるのではないかと考えている。

第二章「作品ノート」

筆者が1999年から取り組み始めた塑造彫刻について、年代順に作品を提示しながら、制作に関する考え方の変化、実制作における技術的な試みとその成果、そして反省などを述べる。また、人間像の制作を積み重ねることによって、新たな表現の可能性が生まれてきた点を例示しながら、「内なる像」は、自己の制作の積み重ねによって発見することに言及する。

第三章「存在の本質『内なる像』の発見へ」

制作者の側の視点に立ち、視覚、触覚、といった知覚による制作と鑑賞の両面から、「内なる像」の存在の意味を検証する。ここでは成形、乾燥、焼成、着色を経て、最終的にテラコッタによる人間表現に至るまでのプロセスに重点を置いて述べる。また、テラコッタによる人体作品の制作において、モデルは作品の存在に重要な役割を果たし、「内なる像」の発見への手掛りになると結論づける。

結語では、本論文を総括し、今後の展望について述べる。

本論文により、今まで、制作した作品の際、制作の過程に感じたことを記述したものを整理する。又、作品には作者の自分自身の無意識の要素が多く含まれている。このようなことについて私なりを解釈に試みる。本論文執筆を通して、彫刻の本質に迫ることを目的としたい。

最後に関連資料として「中国美術学院大学におけるテラコッタの研究授業の記録」について言及している。筆者の母国である中国の、高等教育機関の専門科におけるテラコッタの授業経過とその内容について、実際の体験報告に基づいて述べる。昨年、筆者は中国美術学院大学の彫刻科、第四研究室においてテラコッタによる人間像の表現という研究授業を行う機会を得た。今まで、中国美術学院大学の塑造授業は、石膏、樹脂、ブロンズ、などの素材を主として用い、テラコッタの素材には馴染みが薄かった。この関連資料においては、これらの現状、その背景についても言及した。